

研究報告

森田正馬の「土佐の犬神憑き調査」について

— 祈祷性精神病提唱への粗描 —

大宮司 信

北翔大学教育文化学部心理カウンセリング学科

抄 録

心理療法のひとつである森田療法を創始した森田正馬は、憑依状態を主症状とする祈祷性精神病の提唱でも有名である。彼はそれ以前に、自らの故郷の土佐におもむき、当時みられていた犬神憑きについて調査した。この調査がいかなるものであったかを辿ることは、後の祈祷性精神病の提唱にすくなからぬ意義を見いだすことができると考え、今般この森田の調査の実態や、調査をめぐる当時の時代状況について検討を試みた。

キーワード：犬神憑き、祈祷性精神病、森田正馬

I. はじめに

筆者はこれまでアイヌ民族に特有のイムという現象に取り組んできた。西欧から由来した精神医学からヒステリーの原形として位置づけられていたイムは、心理的な症状は類似していても、イムが存在し継承されてきたアイヌ民族の中では病気とはみなされず、さまざまな形で文化の中に溶け込み、人々の生活のいわばスパイスとして働いてきたことを報告してきた¹⁾。

この研究の流れの中で、イムと類似する意識の変容状態を伴う「憑きもの」という現象が、日本人の中で大きな役割を果たしてきたことも報告してきた。そこでは、憑きものによる災いや、憑きもの落としという治療、そして憑きものに類似する遊び、他にも能や狂言の中で憑依という現象の示す心的特性が日本人に共有されていること、また共有されているからこそ、こうした文化が花開き、場合によっては現代でも、例えばこっくりさん遊びや自己啓発セミナーの中にも潜んでいることを報告してきた²⁾。

そうした長い歴史のある憑依の中でも、とりわけ森田療法を創始した森田正馬による祈祷性精神病はその集大成であり、また日本ならではの疾病概念の金字塔と言われており、この問題についても詳しく検討してきた³⁾。

さて祈祷性精神病が提唱される10年以上前に、森田は自らの故郷の高知県（旧：土佐）に出向き、そこで犬神憑きについて調査し報告している。この調査がいかなる

ものであったかを辿ることは、後の祈祷性精神病の成立に一定の意義を見いだすことができると考え、今般この森田の調査の実態や、調査をめぐる当時の時代状況について検討を試みた。

以下、この森田の「土佐の犬神憑き調査」を「調査」と略称する。また本報告はこれまで入手し得た資料に基づいており、現時点でも必要ではあるが未見ないし入手不能な資料があり、これからもさらに検討すべき課題もっていることを附記しておきたい。

II. 「調査」までの明治期の憑きもの研究及び調査

ドイツ精神医学を中心とする西欧の精神医学が日本に導入されたのは明治期以降であり、後の東京大学医学部の内科学講座の中で精神医学の講義が始まったことが出発点と言えよう。

もちろんそれまでに、中国由来の中医学・漢方医学、日本独自の医学が存在しており、その中で狐憑きなどの憑きもの現象は記述されており⁴⁾、明治期以降でもそうした報告は探し出すことができる⁵⁾。

ただし西欧的な医学（この際はドイツ精神医学）から憑依が注目されるようになった初めは、おそらくベルツによる憑依についての記載⁶⁾であろう。彼がどのような意図でこの研究を始めたかは必ずしも明らかではないが、おそらくは啓蒙思想を背景にして、我が国に近代医学・近代精神医学を導入するにあたり、日本における迷

表1：森田までの主な憑きものの調査

調査者	調査時期	調査地域
1. 島村俊一	1981年（明治24年）7月23日～8月29日	島根県
2. 荒木蒼太郎	1900年（明治33年）3月16日～4月10日	徳島県
3. 門脇真枝	1902年（明治35年9月5日）発刊	東京都
4. 森田正馬	1903年（明治36年）8月11日～9月11日	高知県

信・風土を改善したい、あるいはしなければならないという意図のもとに取り上げられた代表的な一つが憑きものの現象だったのではなかろうか。

西欧においては狼男のような獣への変身は伝えられていたし、人格的な存在である悪魔が憑くという現象もあったわけだが、日本のような動物が憑くという現象は珍しく思われたに違いない。

この視点、すなわち我が国における迷信・風土を精神医学の面からも払拭したい・或いは是正しなければならないという姿勢は、その後の調査・研究に携わった日本の研究者の基本的な姿勢になったと思う。この流れは私見では、内村によるイムの研究⁷⁾まで、姿を変えながらも続き、その一方、地方・風土に生きる人々のもつ見方や生活の中での意味づけなどが捨て去られてしまった点も見逃してはならないであろう。

この方向性は森田にも受け継がれ、精神医学の内部で憑依を位置づけようとする彼の発想に繋がっていったと考える。その結晶が祈祷性精神病概念の提唱であることはもちろんである。

Ⅲ. 「調査」の時期的位置

日本のいわゆる地方における「狐憑病」と呼ばれる憑きものの調査のはじめは島村による1981年（明治24年）に行われた島根県の調査であろう⁸⁾。この調査記録は長い間いわば埋もれており、岡田によって再発見されたといつて過言ではない⁹⁾。島村の経歴や個人像については岡田の研究がある¹⁰⁾。

島村は1981年（明治24年）7月8日東京を出発し9月2日にその終結をみるまでの約2ヶ月の間、島根県に調査に入り34例の狐憑きを報告している。

これに続いて9年後の1900年（明治33年）、徳島県を対象にした荒木の調査が、3月16日から約1ヶ月の間にわたって行われた¹¹⁾。

この2件の調査は、いずれも古くから憑きものが多発する地方であることが知られており、調査に赴くに適した地域であることが頷ける（荒木はその後岡山県内で認めた合計10例の「附憑狂」（憑きもの症例）も報告している¹²⁾）。

これに続いて発表された研究は門脇真枝の1902年（明

治35年）に発刊された狐憑病新論¹³⁾であろう（ただし門脇自身は本書の前書き（「緒言」）で、結果報告を指導者に当たる東大の榊・呉に提出したのは1986年（明治29年）であったと記載している）。これは東京の精神科病院に入院している113例を対象としたもので、島村、荒木の研究とは異なってはいるが、同じ憑きものを対象とした特筆されるべき研究であり、精神医学における憑物研究のはじめとされることもしばしばである。

しかし岡田⁹⁾が指摘するごとく、門脇は島村・荒木の調査も知っており、上記著書にも詳細に引用記載している。そうした点からも門脇の研究をこの方面の研究の日本における嚆矢とする意見はやや物足りない。

森田の調査は門脇の著作の出版1年後の1903年（明治36年）に行われた。従って門脇を含むそれ以前の調査・研究を森田は読んでいた可能性が高い（以上に関して表1参照）。

Ⅳ. 「調査」の実際

森田は1903年（明治36年）8月11日（火）東京を出発して、同13日（木）高知に着き、翌14日（金）から実質的な調査を行っている。彼は調査に関する添書を得ており、まず調査対象地域に詳しい県庁や警察に赴き、状況を聞き、調査を円滑ならしめるような依頼をしたのち、実地調査を開始している。

自筆日記によれば8月13日（木）以降、何人かの新聞記者にあっており、14日（金）の自筆日記には「余ノ調査目的、道程等、新聞ニ掲載ノ事ヲ依頼ス」とある。この記述からは、地元の土陽新聞に2回にわたって掲載された調査予定がその内容と考えることが出来よう。その第2回目の掲載内容と、野村の評伝¹⁴⁾による調査の後半部分、そして森田自筆の日記を合わせて、調査の期日・地域を表2にまとめた。

まず彼は故郷の自宅のある兎田に赴く。翌日からは父養寺・野市などの自宅周辺に出かけている。本格的な調査は8月19日（水）からはじめている。これは約1週間にわたっており、出発点となった実家の兎田からみて北東方面にあたる山田・美良府・根須・大栃などが対象地域となっている。

なかでも大栃は、独特の民間信仰と風習を持ち、後に

表2：森田正馬の犬神憑き調査日程
(1903年(明治36年))

土陽新聞	期日	日記・評伝	犬神憑き症例
記載(-)	8月14日(金)	高知	
	8月15日(土)	高知, 兎田	
	8月16日(日)	兎田, 父養寺	
	8月17日(月)	父養寺, 兎田	
	8月18日(火)	兎田, 野市	*
	8月19日(水)	山田, 美良府	
	8月20日(木)	美良府	
	8月21日(金)	根須, 大柵	*
	8月22日(土)	大柵, 根須	*
	8月23日(日)	根須, 大柵	
山田, 父養寺	8月24日(月)	山田	
	8月25日(火)	山田, 父養寺	
赤岡, 岸本	8月26日(水)	赤岡	
	8月27日(木)	兎田	
	8月28日(金)	山北	*
野市高田, 高知 甲村, 下田, 宿毛	8月29日(土)	立田	
	8月30日(日)	吉原, 立田	
	8月31日(月)	立田, 須村	
記載(-)	9月1日(火)	西山, 宮の内	*
	9月2日(水)	岸本, 兎田	
田野, 奈半利, 安藝, 甲浦, 安田	9月3日(木)	記載(-)	
	9月4日(金)	高知	
	9月5日(土)	高知	
	9月6日(日)	高知	
	9月7日(月)	高知	
	9月8日(火)	高知, 吹井	
	9月9日(水)	記載(-)	
9月10日(木)	高知(発)		

「いざなぎ流」と名づけられた信仰で有名な物部の中心地であり、彼がまずこの地方で調査しようとしたのは、こうした信仰を背景とした犬神憑きが見られるのではないかと考えたからではないか。ただし不思議なことに

「いざなぎ流」関連についての森田の論述あるいは記事は、筆者の調べた限り、これまで見いだすことが出来ていない。この地域は物部川の流域の奥地に点在し、現在でも交通に難渋する地域であり、森田も調査に困難を覚えたにちがいない(論文末の付言参照)。

8月25日(火)頃には、いったん自宅周辺の父養寺・赤岡などの調査を行ったあと、自宅がある兎田にもどっている。

野村の評伝⁴⁴⁾はその翌日の8月28日(金)から記載がはじまっている。この評伝は全集に登載された森田自身の上述した記録以上に詳細であるが、それは本論文でも依拠した森田の自筆日記によるからであろう。しかし野村の記載は8月28日(金)からとなっており、それ以前の記録、特に犬神憑きとの関係が深いと考えられる物部関連地域での調査を記載していないのは不思議である。

森田の調査はその後、兎田・高知周辺の西山・立田・岸本などで行われている。さらに南西の吹井・宮の内、足を伸ばして山北にまで出かけている。しかし土陽新聞に予告された西方面の田野・奈半利・安藝、甲浦、安田での調査記録はなく、出かけなかったと考えられる。

表3は森田の「我が家の記録」の調査記載である。全体として短く、調査内容よりも、講演、歓迎会、演説の記載が中心であり、調査は確かに行われたが、むしろ故郷への凱旋といった色彩が強く、野村もまたそのような指摘をしている。

表4のように、森田は後に(昭和9年7月15日の記載)、この調査に赴きたいきさつについて書いている。これによると、まず犬神憑き調査を計画し、その後

表3：森田自身による調査の記録

8月11日醫科大学より派遣され、60余圓の旅費を受け、郷里高知県に犬神憑研究のため30日間旅行す。調査後、高知市医師会にて同研究成績を報告す。演説凡そ3時間に亘る。之れ余が学術演説の初陣なりしなり。演説中、小松先生は余のために演壇の水の代りに酒を入れ呉れたり。演説の間、三合許も飲みたりしならん。同夜は余の歓迎会あり。小松先生は余のチフスを治療せる方にして其後、常に余を庇護せるが當夜は宴会後、更に12の人々と共々観遊樓に至りて夜を徹したりき。尚ほ余は犬神憑調査中、並生村の村芝居の舞臺に横矢氏の紹介により又山田村々長松尾氏の宅に、又巳の村に於て共に犬神の迷信に就て演説したりき。

(「我が家の記録」より、森田正馬全集、第7巻、775頁。かたかな表現は変更)

表4：犬神憑き調査の発端

私が土佐へ犬神憑調査に出張したのも、それです。ある日、呉先生が、「いま教室に、60円ばかり旅費が残っているが、誰か行きたい者はないか」という事であった。こんな時に、先輩をさしおいて、自分が先に口を出せば、同僚に憎まれるから、慎まなければならない。ただ頭をあげ、ニコニコしてキョロキョロと先生の顔を見ている。そうすると、先生が「森田君、どうです」とくる。「待つてました」とばかりに、「もしさしつかえのない事なら、ぜひお願いしたいものです」と答える。勿論その時には、私はどこへ行って何を調べるかという事は見当はつかない。まずその機会を取り込んでおいて、しかる後にユルユル考案するつもりである。(中略)。調査旅行につき、まもなく思いついたのは、土佐の犬神調べです。土佐は私の故郷であり、夏休の帰省と一挙両得です。それから1ヵ月間ばかりも、暇々に図書館へ行って、それに関係した事を調べた。郷里では30日ばかり巡回して犬神を調べた。その時の事です、高知医学会で、その講演を3時間近くしゃべった。これが私の最初で、かつ最も長い時間の講演であったのです。この事は私が大学卒業後、たった6ヵ月の時ですから偉いではありませんか。

(第46回形外会(昭和9年7月15日)、森田正馬全集、第5巻、535~536頁。)

日的な表現でいうグラント請求のようにして調査費を獲得したのではなく、まず教室に残っている旅費を教室主任の呉秀三から獲得した後に犬神憑き調査を思いついて、図書館などに行って調べ実現させたのが実情のように読める。つまり犬神憑き調査は、故郷への凱旋旅行のための理由作りといった印象すら受ける。

V. 島村・荒木の調査研究との比較

森田の犬神憑き調査の36例の報告は、後に述べるように、かなり遅れて報告されている。簡単な報告・論文は調査直後にされているが、島村・荒木らは調査終了後、短期間のうちに詳細な報告をしている。

島村の報告論文では、こうした報告のほぼ嚆矢ということもあるのだが「狐憑きと狸憑きは同じかと」といった問題意識も書かれており、また狐憑きと呼ばれている状態の中には、身体疾患をはじめとする別の疾患が憑依状態を呈する狐憑きと入り混じっていることが記載されている。

一方狐憑きの成立、特に村の裕福な階層に対する嫉妬が犬神筋を生んだのではないかという島村の見解は、後の文化人類学における犬神憑きの社会的側面を物語っている。また当時から婚姻関係に関して犬神筋が忌避されている記載も見られる¹⁵⁾。

荒木の徳島における調査も島村のそれと類似しており、彼もまた数多くの症例を報告している。なお徳島には憑きもの落としとして有名な賢見神社がある。徳島を調査するなら当然この賢見神社の存在は無視できないはずであるが、荒木はこれについては一切触れていない。

ちなみに森田が調査した大柵を中心とする物部にも多くの神社があるが、筆者の調査時点では、神社本庁組織に属する神社とそうでない神社を比べると憑きものや人々の生活に根ざした加持祈祷に関しては、後者が中心となっており、一線を画しているようにみえた。

森田の調査における症例も島村・荒木の報告と類似しているが、地域の人々が犬神憑きと呼称しているのとは別に、彼は憑依状態における犬神憑きと他の疾患（ヒステリー、強迫神経症、パセドウ病など）を一応分けており、また催眠を介して犬神憑きの中心に意識変容を見ようとしている点が新しい着眼とみることができよう。

VI. 「調査」後の森田の動向

調査翌年の1904年（明治37年）4月2日に、森田は神経学会大会で「調査」について報告をしている。調査後6か月である。この報告と同一内容と考えられる論文は同じ年の学会誌に書かれている。ただし、ごく短いもの

である¹⁶⁾。

この2年後の1906年（明治39年）に地元の高知新聞に「土佐の犬神」という談話を発表し、地元の人物との間の討論があったという。議論の中心は催眠に関するものであったらしい。また調査4年後の1907年（明治40年）、土佐協会雑誌という地元誌に「土佐の犬神」という記事を3回にわたって連載したという。この2件は日記の記載からの情報であるが、資料自体について筆者はまだ見ることができていない。

VII. 「祈祷性精神病」の提唱と「調査」との関連

1915年（大正4年）、調査後12年を経て、12月9日に鷹城会という集会で、森田は「祈祷性精神病について」、同12日に巢鴨病院集談会で同じ題目の演説を行う。これが祈祷性精神病のかなり早期の発表となっている。そして森田の祈祷性精神病のいわば正式な提唱は同じ年に神経学雑誌に掲載された有名な論文である¹⁷⁾。

森田の土佐の犬神憑き調査のいわば正式な報告は、上述したように1904年（明治37年）の神経学雑誌に記載された「土佐ニ於ケル犬神ニ就テ」である。加えてこれも前述したようにいくつかの関連した記述をしているが、この犬神憑き報告をおそらく基本にしたであろう祈祷性精神病の提唱までには約12年間の期間がある（表5）。

しかしより詳細な発表は、翌1915年（大正4年）に「人性」という雑誌に4回にわたって掲載された「迷信と精神病」¹⁸⁾であろう。これには「附、余の祈祷性精神病について」というサブタイトルが付けられている。た

表5：犬神つき調査から祈祷性精神病まで

- | | |
|----|---|
| 1. | 1903年（明治36年）（30歳）8月11日～9月11日：犬神つき調査 |
| 2. | 1904年（明治37年）（31歳）（調査後1年）
・4月2日：神経学会で「土佐の犬神」講演
・土佐ニ於ケル犬神ニ就テ。神経学雑誌。3：129-130, 1904 |
| 3. | 1906年（明治39年）（33歳）（調査後3年）
・9月3日、高知新聞に「土佐の犬神」談話連載。 |
| 4. | 1907年（明治40年）（34歳）（調査後4年）
・「土佐の犬神」を土佐協会雑誌に3回連載 |
| 5. | 1914年（大正3年）（41歳）（調査後11年）
・12月9日、鷹城会にて「祈祷性精神病に就て」
・同12日、巢鴨病院集談会に同題に就て演説。 |
| 6. | 1915年（大正4年）（42歳）（調査後12年）
・余の所謂祈祷性精神症に就て。神経学雑誌。14：286-287, 1915
・迷信と精神病：8～12月（「人性」に4回連載） |
| 7. | 1918年（大正7年）（45歳）（調査後15年）
・9月14日、変態心理会にて「神憑に就て」講演 |
| 8. | 1930年（昭和5年）（調査後27年）
・土佐の犬神。土佐公論。2：25-27, 1930 |

表6：森田による自験憑依症例のまとめ

嘗て余が実験せる憑依病者36例を、病名によりて別てば、「ヒステリー」症乃至「ヒステリー」性精神病、女10人男1人、種々の神経症、女10人男2人、早発性痴呆（憑依妄想を有せざる）、女4人、他の身体病が9例であった。（中略）又憑依と名づけらるゝ所以は、患者は精神異常を呈せざるも、祈祷者の命名、若くは加持臺によるものが9人、患者が祈祷の後、初めて人格変換を起し、囁語を發するもの12人、患者が祈祷なしに、自ら人格変換を起し、或は神前に豊拝し、或は他の祈祷の声を聴きて、人格変換を起すもの、其他患者は初めは祈祷によるも、後には習慣となつて、祈祷を様せざるに至れるもの13人等であった。

（森田正馬全集、第6巻、726頁）

表7：森田の自験例—「祈祷で犬神憑にする」

52歳女、農、犬神憑、病名、神経質。
患者は生来健康であったが、産後、俗にいふ血の道に罹り、後々犬神憑となつた事がある。症状は頭痛、腰痛、食気不振、疲労感増進等がある。初めは別に人格変換などはなかつたが、祈祷者が之を犬神憑と診断し、祈祷をするようになって、初めて自ら思はざる事を口走り、思はざるに大食する様になり、其言語挙動、好悪等全く其憑いたといふ人の人格に一致し、初めて患者自らも其犬神憑であるという事を信ずる様になり、後、血の道の起る毎に、祈祷をすれば、必ず其犬神が憑いたといはれた。其犬神の去る徴候は、祈祷の間、御幣を手から投げ出す事で分り、其去らない時は、御幣は患者自身の方に向く事で分る。別に普通の定型の様には走り出す等の事はない。患者は其人格変換の間の行為は、全く追想がないといふ。只家人から其時の事を聞いて初めて、其犬神である事を信ずるのである。現在は健康で労働に従事して居る。

（森田正馬、全集第6巻、729頁）

だしこのサブタイトルについて、及び祈祷性精神病の内容についての詳しい言及はなされていない。

この中には土佐における調査から得られたと考えられる事例が記載されており、犬神憑き調査の内容に関する報告としてはより詳しい。その全体のまとめは表6に、また事例としては表7のような症例として掲載されている。

この「迷信と精神病」は大正4年12月1日発刊の第11巻12号に発表された第4回をもって唐突に終わっている。この4回の末尾には「以下次号」となっているが、その後の発表あるいは記載はない。連載の最後はいかにも中途半端でしかも突如終了という状態である。

「人性」の次号以下にしばらく森田の記事はないが、第12巻の4号には「常識について」という短い論説を発表しており、「人性」そのものから執筆の手を引いたということではないと思われる。

なぜ彼は途中で終わり、なおかつ祈祷性精神病についての細かい論述、とくに我々の興味をひく意識変容について述べなかつたのかという点については興味深いだが彼はこの点について何も語っていない。

この後彼は45歳の1928年に「神憑について」の講演をし、また昭和5年には「土佐公論」という雑誌に「土佐の犬神」という簡単な論述をしているが、それ以外に憑きものについての発表は見つけ出すことができない。

Ⅷ. ま と め

森田の土佐の犬神憑き調査は、流れとしては後の祈祷

性精神病に伝わったことは間違いない。土佐における犬神憑き症例は神経誌の祈祷性精神病論文の数少ない臨床記述の一部にも出てくるし、またその詳細は別途掲載された「人性」論文に詳しく表れている。

しかしもともとこの調査自体が、彼が意図したというよりは「先に旅費有り」といった形で出かけ、もちろん調査はしているものの、故郷へのいわば凱旋といった色彩が強く、野村の評伝¹⁴⁾もそうした印象を述べている。

土陽新聞に語った彼の計画がそのままであれば、故郷兎田あるいは高知中心の調査だけではなく、もう少し離れた東方面の地域でも、調査後半で行われるはずである。しかしそれらの地域の調査記載はない。この辺りからも彼の犬神憑き調査が島村・荒木のように意図して、それだけを中心を越えたというよりは、随分色彩の異なるものであったと考える。

もちろん彼は調査直後に報告はしているが、短い講演と論文に留まり、島村や荒木のような広範な報告はかなり後になって、祈祷性精神病の概念提唱と同時にしている。

彼が自らの調査から祈祷性精神病という疾患単位を考え出したことはもちろん特筆されることであるし、憑依研究の金字塔であろう。特に人格変換、変性意識状態への着目は島村・荒木の調査には十分には表れていないし、今日に至るまでの憑依研究の中心になったことは間違いない。

その点で彼の土佐の犬神憑き調査の結果は当初意図したものとは、あるいは異なる副産物だったかもしれないが、憑依研究において重要な研究結果を生んだことにな

ろう。

ただしそれには彼のもう一つの研究，すなわち催眠の研究がなければ憑依の本体である意識変容には思い至らなかったのではあるまいか。現に彼はこの土佐の調査の中で犬神憑き患者に催眠を試みて犬神憑きと同様な状態を顕現せしめている。森田の土佐の犬神憑き調査は，当初意図しなかった思わぬ成果を生むという点からみて興味深い，催眠という点からみれば出るべくして彼が生み出すことができた成果とも考えられよう。

【付】

森田が「調査」をおこなった時代には，もちろん「いざなぎ流」という言葉や研究が存在していたわけではない。しかしその影響を受けた弓祈禱などの犬神落としは存在していたと筆者は考えている。

【謝辞】

森田正馬の自筆日記の閲覧に関しては，高良興生院森田療法関連資料保存会のご厚意を得た。記して感謝の意を表したい。

IX. 文 献

1. Daiguji, M.: Imu phenomena observed among the Ainu people in northern Japan: past and present. 北翔大学北方圏情報センター年報第4号：1-4, 2012
2. 大宮司信：日本における憑依研究の一側面－精神医学の視点から。北翔大学北方圏学術情報センター年報第6号：1-6, 2014
3. 大宮司信：祈祷性精神病－成立と展開。北翔大学北方圏学術情報センター年報第8号：1-7, 2016
4. 陶山尚迪：人狐辨惑談。文泉堂林權兵衛，1818
5. 江澤圭磨：犬神附或ハ狸神附ノ説。東京医事新誌，54号：16-20, 1879
6. Baelz, E.: 狐憑病説。官報，469号：5-7, 470号：9-11, 1885.
7. 内村祐之，秋元波留夫，石橋俊実：あいぬノいむニ就イテ（あいぬノ精神学的研究，第1報）。精神誌，42：1-69, 1938.
8. 島村俊一：島根県下狐憑病取調報告，東京医学会雑誌，6：699-705, 769-778, 981-986, 1049-1054, 1141-1146, 1892, 7：124-128, 233-236, 468-471, 1893
9. 岡田靖雄：狐憑き研究史－明治時代を中心に。日医史誌，29：368-391, 1983
10. 岡田靖雄：島邨俊一小伝：悲運の精神病学者。日本医史学雑誌，38：603-636, 1992
11. 荒木蒼太郎：徳島県下ノ犬神憑及ヒ狸憑ニ就キテ。中外医事新報。485号：5-12, 486号：15-29, 1900
12. 荒木蒼太郎：附憑狂ニ就キテ。中外医事新報。493号：1-6, 1900
13. 門脇真枝：狐憑病新論（東京博文館刊，1902）。精神医学神経学古典刊行会，東京，1973.
14. 野村章恒：森田正馬評伝。白揚社，東京，1974
15. 吉田禎吾：日本の憑きもの。中央公論社，東京，1972.
16. 森田正馬：土佐ニ於ケル犬神ニ就テ。神経学雑誌，3：129-130, 1904.
17. 森田正馬：余の所謂祈祷性精神症に就て。神経学雑誌。14：286-287, 1915.
18. 森田正馬：迷信と精神病（附）余の所謂祈祷性精神病に就て。人性。11：229-235, 270-279, 349-354, 389-399, 1915